

# 『詠歌こころの種』

## ——解説と翻刻(一)——

A Reprint and A Study of "Kokoronotane" by Hagiwara Hiromichi (1)

増淵 勝 一

Katsuchi Masubuchi

### 〈解説〉

『詠歌こころの種』は萩原広道(一八一五—一六三三)の編著。嘉永三年(一八五〇)春、広道三十六歳のときに刊行されたものである。巻末の広告に、「心のたね 萩原先生編輯 小本全二冊」とあり、

此書は近来詠歌の事に用ある書の中より、緊要の事どもを晋く引出て、初学の心得やすきやうに今案を注し、此一部にて歌学の伝授、事すむべきやうに秘説を惜まずあらはされたる書なれば、歌よむ人の座右にありて益あるべきもの、此書の右に出るはなし。

と解説されている。

今、本書の目録を列挙してみると、以下のとおりである。

上の巻

○分類題字並虚字実字 初

○仮名用格抄 八

○字音仮字用格抄 二二

○四季動植分類名所集要 三十四

○玉霰小夜時雨目錄小解 五十八

下の巻

○てにをは紐鏡縮図弁略解 初

○合辞俗譯 六

○詞の八衢四種活の図弁略解 七

○同目安字注 十六

○歌会略式 四十二

○懐紙短冊詠草の書式 五十三

たとえば『玉霰』は本居宣長の著であり、『詞の八衢』は同じく春庭の作である。『てにをは紐鏡』も宣長の著。それでその文章のまま広道が歌道初学者のために切り取って来たということになると、剽窃ということになって問題となろう。しかし広道は、そっくり原文を切り取っているのではなくて、要点をまとめたり、原文の傍らに注解をつけるなりしているのである。

仮名づかいから始まって、動植物や名所の分類・文法・歌会式目・短冊書式など、和歌入門者への親切な手引き書になっている。一冊で理論と実践を兼ね備えているといってもよい。当然現代の私どもにも大変参考になる書物である。

小本であるが、上巻は七十七丁、下巻は六十丁に跋文が付いている。本稿では、下巻の一編「歌会略式」の全文を翻刻した。王朝以来の伝統のある歌会の実際は、たとえば皇室の歌会始や、京都の冷泉家などにも伝存している。江戸時代には歌会が武家や町人階級にまで流行した。たとえば柳沢吉保なども、自邸で北村季吟を点者として、何度も歌会を開いている。準室の正親町町子は吉保とともに千首和歌をよみあげ、靈元院に献上して、その中から五十首を抄出して下賜されてもいる（拙著『紫清照林古典才人考』二二六頁・一九九五年二月刊）。もちろん町子も柳沢家の歌会の会衆の一人であった。

広道がその歌会の式目を示そうとしたのも、歌会が庶民の中にまで浸透して来たことと無関係ではない。ただ人々が集まって歌をよみ合えばよいというわけではない。堂上衆の方式をそのまま踏襲せよとまでは言わないが、これに準ずる程度のルールを守って歌会が行なわれるべきである、という思いが広道にはあった。和歌にはまだまだ神聖なものが存在していると、広道は考えていたのだろう。それとともにそういう会式を学び、守らせることによって、礼儀作法や長幼の序といったことまで学ばせて、教養ある人間を作り出そうとする、教育観をも持っていたのだと思う。

この「歌会略式」に注記されている会式は、一見わずらわしく、形式主義的なものにも思われようが、厳肅な雰囲気があり、当時の人々が和歌道に敬意を払っていたこともよくわかる。茶の湯の会式などと重なるところもある。精神的な修養にはたまにはこういう会式にのつとった歌会や茶会もあってもいいのではないか。

そんな思いに捉われながら、この「歌会略式」を翻刻してみたのである。

底本は嘉永三年春、京都恵比須屋市衛門、江都山城屋佐兵衛以下二名、浪華河内屋清七以下二名の、三都書林発行の小本である。本書には『心のたね』上下二巻のほか、巻末に『は山のしをり』（嘉永元年九月刊・全三十九丁）が合本となっている。

翻刻にあたっては、漢字は新字体で統一。繰り返し符号「〜」  
「く」はもとの字句に置きかえ、濁点・句読点・会話符号等を付けた。なお、読解の便を考え、項目の丸の中に通し番号を施し、各書き出しは一字下げとした。また振り仮名・送り仮名等で、底本に存するもの以外に施す場合は、（ ）を付けて区別した。

#### 〈翻刻〉

#### ○歌会略式

うたの会にはむかしより式あることなれど、それはみなひさかたの雲の上はるかなる御あたりの事なれば、下がしもたるおのがどちのみだりにおこなふかぎりにはあらず。しかはあれどもみやびかなるいにしへの口まねするともだちのつどへらんに、むげにあさましきふるまひのみせんも、さすがにくちをしく、はたむらいなることなれば、さきに『私家歌会式』といふふみをつくりて、おのがかくれがをとひて物まなぶ人々に、さるよういどもしめししことありき。其（の）ふみの中よりえう（音）とある事のみをいささかづつぬき出（で）て、ここにかいつく。

大かたちかきころ、歌の会とてするを見きくに、いとこちこちしく、むらいなる事おほかれども、見とがむる人だになくて、いよいよしどけなくなりもてゆくは、まことにあさましきことども也。たとへば茶の湯といふことは紹鷗・宗易らより、つぎつぎも



② 会の日はかねがねさだめおきて、行事よりつどふべき人々のもとへ題をつかはして、あないすべし。人々歌よまば、やがて点者に見せ、てんさくを乞得ておき、其(の)日会亭へたづさへゆくべし。

○ 兼題の歌は懐紙にかくべし。但し短冊にかくべき契ならば、さてもあるべし。すべてあまりに見ぐるしき紙にはかくべからず。大かたおごらはしきわざははぶくべきこと、いふもさならねれど、さすがにみやびわざなれば、むげに心おとりするやうの事は心すべし。

○ よみたる歌はやくてんさくを乞(ひ)ておくべし。会の席にて、にはかにもものする事は、むかしよりいましめられたることなり。

○ 懐紙のはしづくりに、かならず季同をかくべし。「季同」とは「春日・秋夜」の字のこなり季同なきはむらいなること也。ただし同輩より下なる人のみならば、かからぬよしもあれど、神像の前などにては、かくかくぞよき。短尺も通題ならば題をかかぬぢやう也。これはみな其(の)座の長(をき)べなどにしたがへる意なり。然るを、ちかきころは、いづれも季同をかかず。短ぎくに題をかきなど、みだりなる事おほし。さるは古学する人などは、かうやうの事はことにもあらず、思ひけちたる故なるべけれど、すでに無礼と定(ま)りたることを、おしたちて犯し出(ださ)んは、いとをこがましく、こちなきわざなり。

③ 会の席は床の上に神像をかけ、学ぶ机をすゑて物どもそなへ、その前に文台をおくべし。

○ 神像はおほかた柿本人麻呂朝臣の影、或は山辺赤人宿禰、また貫之・躬恒のぬしたちなど、会衆のこのみに随ふべし。但し、よにしらぬ人の像などはかくべからず。追懐の会など

に、その人の影などかくるはこの外なり。

○ 供物のことはここに省く。委しく『私式』にいへり。

○ 文台といふもの、今の世にあまねくもてあつかふ物は、いといと後世にいでこしものと覚えて、うたがはしきものなれど、暫く時にしたがひて、用(ゐ)ることもあらん歟。此れも『私式』にいへり。

○ 月花のためにまうけたる会ならば、神像をばかけずして、月花のかたを上と定むこともあるべし。

④ その日は契りたる時よりすこしはやくゆきて、次の間に(待ち)をるべし。其(の)時にならば、行事あないして席につく。点者よりつぎつぎにちいづへし。

○ 契りたる時をゆゑなくおこたりて、おそく来るは、いみじきむらいなり。此(の)事ちかきころは、はなはだおほし。こころえぬ事なり。また遅く来ながら、いささかの会釈もなく、神影の前にすすみいでて、茶人のかげ物をめづるやうにとみかうみ、見る人などあり。いみじきむらいはさらにもいはず、ほりりかなるが、にくうとぞおほゆるかし。又かならずつくべき座をいつまでもとなくいなむ人あり。なかなかむらい也。一、二揖の後はしひて辞すべからず。

○ ゐなみのついでには、官位ある人の上たるべきはいふもさらなり。其(の)次は武家・社家・儒家・医家・出家・読衆たるべき。今の令に、「儒医諸出家」とあれば也。むかしは出家を武家の上におくことなりしかど、今世は人によりて、さはなりがたき勢があるべし。出家は世ばなれたるものにて、ただうどと、ゐなみを争うが如きことは、仏のいましめに、もれたる事なれば、とてもかくてもあるべければなり。但し、位あるほうしはこの外なり。社家は武家に准へらるる事もあ

るうへに、わが国のでぶりとして、神を崇むならひなれば、神像かけたる歌の会などは格別なる事もあるべし。これは、位ある人はさだの外なり。さてまた、なほ人にてても、世にゆるされたる歌よみのたぐひは、又此(の)ほか也。とにかくに時の宜(よろ)きに随ふべし。

⑤ さて諸行事たちて、神影のかけものをかく。ただし初(め)よりかけてあらば、簾・帳などかかけて座中の人々に会釈すべし。其(の)後ひとりづつしづかに影前へすすみて、懐紙を文台にのせおきて、礼拝すべし。

○ 拝のついででは、末座の人より立(ち)てゆく也。但し、さるべき故あらば、上たる人よりたちてゆくこともあるべし。  
行事 尽(ことごと)くさだすべし。

○ 懐紙は置(き)たるはしを手ひとつばかりをりかけて、懐紙へ入れてたつなり。さて文台の左のはしつかたにのせおくべし。はじめに人左(に)のせたるは、右のかたへおくりて、その左におくべし。

○ ゆゑありて来ぬ人、また女房の懐紙は、文台の下へいれおく也。また右の方に扇にのせておく事も故実也。出家と少年とは、これに准ふる事あるべし。

○ らいはいのやうは、文台より三尺ばかりこなたより左、右と膝行してすすみより、また左、右、左と膝行して退くよし也。されどあまりにこちごちしからず、めやすきやうにして、ぬかづくべし。

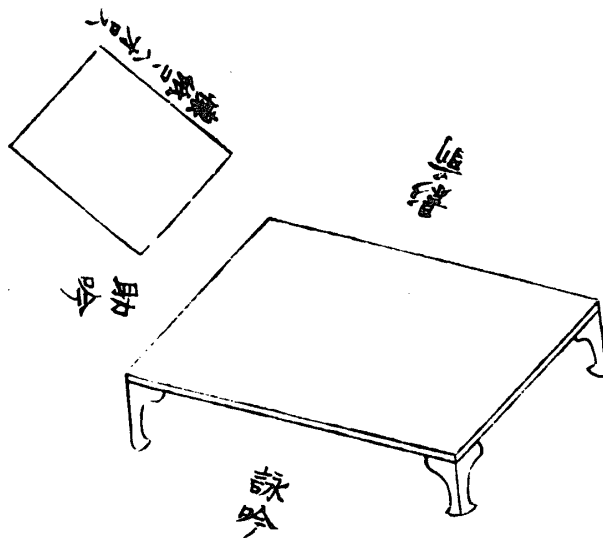
⑥ 次に行事いでて文台をとりいれて、よむべきついでをとのへ、また持(ち)いでてよきほどの所にすゑおくべし。

○ 文台を勝手の間へもちゆきて、詠吟者・助吟者とともに見

て、ついでをたつる也。よみがたきもじ・姓名などあらば、よみぬしにとひおくべし。ついででは上葉を下、下葉を上になるやうにかさねて、文台にのせよ。扇をおきて、もち出(づ)る也。

⑦ 次に助吟者・詠吟者と立出(づ)べし。助吟、座につきて、文台の懐紙をとりて、わが左のかたにおき、一ひらづつ文台にするなり。詠吟それをよみあぐべし。

○ 詠吟者は文台の前に坐し、助吟者は左のかたに横さまに坐すべし。図のごとし。助吟懐紙をおろす時、上葉をさきによむべきやうならば、うらうへにかへしておくべし。



○ 誦(ア)ずべきやうは、ゆるやかにこゑを引(き)て、おだやかによみあぐべし。上さまには披講として、うたふ法ありとうけ給はれど、さること知らぬどちの、みだりにまねぶべきにあ

らず。すべてさること知らぬどちの、みだりにまねぶべきにあらず。すべてあまねく人のえしらぬことを、ひとりおしたちてものするはよからぬこと也。さてまづはしがきをよみ、次に姓名をよむ。端書、はなるべきほどは、もじこゑによむべからず。貴人・長老などの歌は、おしかへしてうち誦すべし。其(の)外は一たびなるべし。詠吟おのが歌をば、会釈して声ひきてよむこと也。

○ 人々わが歌をきく時は、つつしみて拝すべし。貴人・長老はどの歌も、そのぢやう也。

⑧ 事をはりて、詠吟者・助吟者ともとの坐にかへりつきて後、行事、饗のことを、もよほすべし。

○ 当座の歌は饗はててあるべし。但し、近き頃は大かた饗のさきによむこともあれば、会しきにしたがひてもあるべし。又兼題の歌を詠吟せぬうちに饗膳すゑたるためしもあるれば、しひてはなづむべからず。

○ 饗は事そぎて風流なるをむねとすべし。されどあまりにことそがんとて、むげにあさましき物をてうずることあるべからず。誰をあるじともなき会などには、一種物などもよかるべし。ことそぎてみやびかなるわざなれば也。一種ものとは、おのおのさかな一くさづつもちてくる事也。ふるき物にも見えたることにて、をりからつきづきしき心しらひなどあらば、なかなか興あるべきわざなり。されどいちまちめく処にては、さる物うる衆もあれば、たよりにつきて、あつらへつくることもあらん歟。されどきはめたる略式なりとするべし。よくよく心づかひして、ふつつかに、にくげなる物てうぜさすべからず。

⑨ 当座の式は、行事、題かきたる短ざくをもりたる硯蓋をとりにて、当題状よむべき人のまへにもちゆくべし。さて後、もとのところへおくを、おのおのひとりづつ立(ち)、とり来るべし。

○ 当題・当状よむべき人は、その中の貴人・長老なるべし。せばき所などならば、つぎつぎに硯ぶたをおくりて、とる事もあらん歟。されどきはめたる略儀なり。硯箱もこのぢやうなるべし。

○ このたびは上座よりたつ也。硯ぶたの前に膝行して、左の手に短冊をとり、右へうつして、懐フトコロにし、神前へ、はしきりて、たつべし。扇にはさみてたつといふこともあるにや。されど少しことさらめきたらん歟。よろしきに随ふべし。

⑩ 次に給仕、硯箱をくばりてのち、おのおのたとうがみに題の字をしるしおきて、歌を案ずべし。

○ 紙は上座よりとりて、次々へおくるべし。中を二枚とりて、たてにして、わたすべし。さて紙を二枚ながらをりて、題のもじと名をかきて、硯ばこの下へなかば出(だ)してをく也。かみを折るとき、全てまた膝などへおしあててをるべからずと也。さて二枚とることは、一枚には清書して点者の数をとらんとす也。ちかきころは、堅カタのみじかき紙をいだす人あり。殊のほかつまりて、かきにくきもの也。さる紙、いだしべからず。もし出(だ)さば、長ナガみじかにをりてもくるしからず。よきほどにして、いたくつまらぬやうにかくべし。

○ 饗はてて後、当座の歌よむぢやうならば、行事よくよく席をあらためて、はじむべし。さらずとも火鉢・茶碗・煙草盆の類をば、ことごとくもちさりおくべし。湯茶・煙草、或はさがたき用あれば、しづかに次へいでものすべし。されど大かたはたたぬやうにすべきことなり。

○ 歌を案ずるほどは、安座すること、故実也。されどよろしきに随ふべき事歟。案の中に物がたりし、おとたかく扇をつかひなどすべからず。まして立(ち)てあるくなどは、きはめたるひがごと也。つつしむべし。また詞寄・名所集・類題集の類をもちて、詞をくりいだすことも、いとかたはらいし。初学の輩なりとも、心して見ぬなんよろしき。さて又おのが歌はやくいできたりとも、みだりに題をとりて、いくらともなくよむべからず。他をかへりみず、いとむらいなること也。此(の)事、ちかごろの会にをうを見ゆるは、ちひさく紙をたちて、いくつともなく題をこしらへおく故に、かかる事もありと見えたり。いとわろきこと也。また大かたの人のよみ出(で)ぬさきに、会釈もなく点者のまへにもちゆくこともなめき事也。さほどを見あはせてゆくべし。また人の歌よしとて、みだりにほめののしるべからず。他の人の案中のさまたげとなり、かつは点者・貴人などをおきて、うけばりがほにほめののしらん事も、こちなきわざなれば也。此(の)外もこれにならずらへて知るべし。

⑪ 歌に点者の評をこひて後、短冊にかき、行事に見せて、さて神前に供すべし。

○ 短ざくを行事に見するは、かんなづかひ、もじの誤(り)などをたださんため也。さて短尺ととのひたらば、二(つ)にをり、はじめは題の題をしたへをりこみたるをこたひは上へしてをるべしとぞ。懐にいられて、ひとりづつ神前の硯ぶたの前にすすみ、前のごとく膝行して、右の手にて短ざくをとり出(だ)し、左にわたして、硯ぶたの向ふの角におく也。次々は鳥の羽がさねにおく事、法也といへり。但(し)、例のよろしきに随ふべし。委くは『私式』にいへり。

⑫ その後、行事いでて、硯蓋をとりいれ、短尺のついでをととのへ、もち出(で)ておくを、助吟・詠吟出(で)て、誦ずる事、おはむね懐紙に同じ。

○ 行事、硯ぶたを勝手へとりいれて、詠吟・助吟ともに文字などをしらべ、短尺をのべて、硯ぶたにのせもちいでて、字本を影前にむけて、さきに懐紙を論じたる時、文台のありしところへおくべし。文台には懐紙を載(せ)てあれば、こたひは硯ぶたながらによみあぐる也。

○ 助吟出(で)て、硯ぶたの左に坐し、詠吟向ふに坐する事はじめのごとし。さて助吟左の手に短尺をかさねながらにとり、左の膝をたてながら、右の手にて短尺を一とほりくり返し見て、其(の)まま詠吟にわたす。詠吟も同じく膝を立(て)ながら、もろ手にうけとりて、そのまま詠吟はまづ題、つぎに名をよむ也。このたびはつきつぎによみたるを、下へとりかさねて誦ずるなり。題のもじなど、例のもじこゑにはよむべからず。事をはらば、助吟にわたして、膝をなほす。助吟とりて、硯ぶたにおき、もろともに神前に礼拝して、詠吟より退く也。

⑬ 次に行事、硯ぶたを神前にすすめ、拝して退く。其(の)次に、おのおのひとしく礼拝すべし。さて後に、行事、神前をものごとくになほすべし。

○ 行事、硯ぶたを影前に持(ち)ゆき、短ざくをば文台の懐紙の上におき、硯蓋を文台の下にいれておく也。

○ 人々もろともに拝して後、行事、神影をまきをさむべし。或はすだれ・ちやうなどを垂る事もあるべし。すべて会のはじまらざりし時のやうにするなり。

⑭ 上件の事どもをはりて、おのおの点者・亭主へいはひごとをのべて、会釈をすべし。さて行事、懐紙の短尺をとちて、うら書(き)をする也。その後に饗膳・盃酒の事ありて、家にかへる。

○ 懐紙・短尺のとぢやうは、前にしるすべし。饗膳をここにすうるぢやうならば、行事かねて用意してあるべし。但し、亭主の殊更にまねき、くはだてたる会ならば、亭主事をはりて饗すべし。さやうの会には、点者また事とりし人々に、引出物などあるべし。歌の会に引出ものある事、ふるきものに見えたり。但し、れいの会しきに随ふべし。

右にしるせる式ども、かくばかりにては、あとはかまなきことのくりいでたるに似て、いかがしけれど、いづれも本づく処(と)ありてもものしたるなり。されどその証(ア)どもあらはし、かからんことは、おもふよしもありて、なべてもらしつ。猶くはしき事は、おのおのその師につきても申(し)なば、むかしのあとをたづねてもあきらむべし。